

少

年

II


巨根崇拜



生

贖





我らを生み、育みし母なる御方よ——
どうかこの地に、豊穣の恵みをお与えください。

我が族を慈しみ、富と喜びが尽きることはないように。
我が族の血脈を継ぎ、命が代々繁栄するように。

もし御声を賜るなら、
我がすべてを、捧げましょう。



生贄少年II


第一章 — 浄化




少年は、衆人の視線を受けながら、ゆっくりと水へ足を踏み入れた。浄身とは、穢れを洗い流すだけではない。それは「変わる」ということ。人の汚れをそぎ落とし、捧げものとしての清き器へと至る道。

この貯水池の上流には、神の宿る聖池がある。闇が蔓延る時代にあつて、聖池の水に潤された土地は、災いと病から守られると信じられていた。






少年は水車の上へと据えられる。細い身体が、不安定な足場の上で揺れた。車輪の縁には、乾草で編まれた刷毛が結わえられている。回転とともに聖水を含み、その身を幾度もなぞるためのものだ。



族長の号令のもと、上流の堰が解かれ、奔流が落ちる。衝撃を受け、水車は唸りを上げて回転を始めた。

細い身体は、必死に脚を伸ばして姿勢を保とうとする。だが、巨大な水車によって回転する刷毛は容赦なく、その股にある弱々しい陰囊と生殖器を擦り、削る。誤って脚を曲げて座ろうとすると、刷毛の毛が皮膚に食い込むほどだ。



水量が増すにつれ、水車の回転は速さを増す。打ちつける衝撃は、やがて熱を帯びた感覚へと変わっていった。濡れた輪は滑り、何度も足を弾き返す。逃れようとするほど、彼は回転の中へ引き戻された。

生贄が受ける苦しみに対して、神霊はそれに応じた祝福を与え、その喜びを満たす。しかし少年の村は下流に位置し、聖なる池の水はここから流れ出て、雨水や他の水源と混ざり合い、その濃度は薄まってしまふ。そのため、池の祝福を全身に染み込ませるには、より長い時間を要する。

浄化儀式を円滑に進めるため、少年の両脚は左右に広げられ、全身の重みが水車にかかった。少年の苦痛を和らげるため、彼らは池の水を少年の口に注ぎ込み、聖水の効力がより速やかに全身に浸透するよう促した。





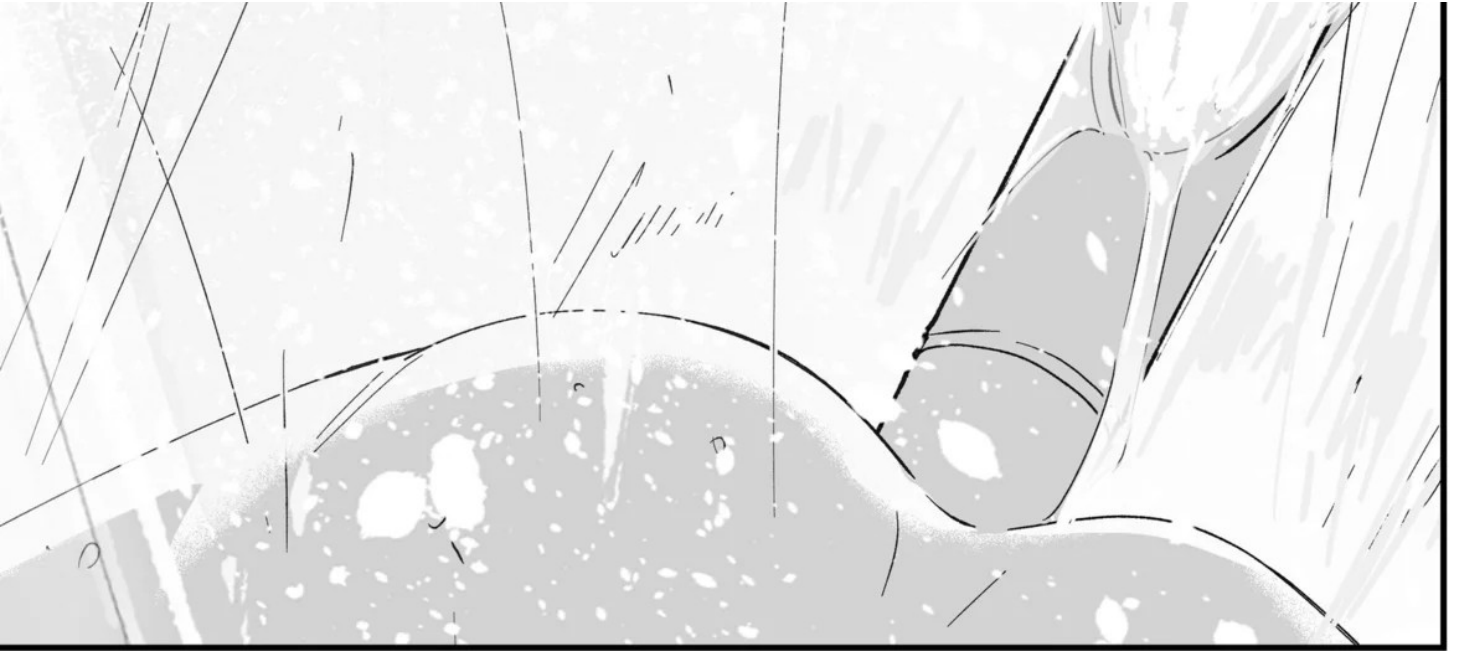
神の祝福は、ついにその身に現れた。痛みは次第にやわらぎ、代わって穏やかな高揚が、痺れていた両脚のあいだから広がっていく。

彼が思わず体をくねらせると、回転する刷毛の毛先が異なる部位を刺激する。逃れようのない刺激は、やがて意識を欲望の頂へと押し上げていった。



こうして、最初の浄化は終わりを迎えた。





その後、口元を塞いでいたものが外され、少年は再び別の姿勢で水車へと固定される。司祭が祈禱を唱え始める。水の音と少年の荒い息遣いが重なり合いながら、儀式は夕暮れまで続いた。

生贄少年II

第二章 — 育成

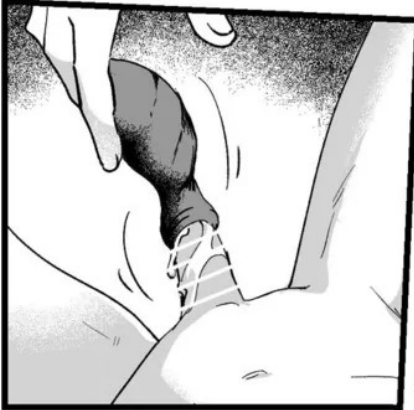
生贄となった少年は祭壇に固定された。浄化を終えたその身体はほのかに紅を帯び、神の祝福を受けた証として静かな昂揚を宿している。神に繁栄を乞うために捧げられるのは、人の精子であった。

少年の幼い身体を、神に仕えるに足る器へと変えるには、いくつもの段階を経なければならぬ。いまなお残る熱と高揚が、やがて訪れる変容の苦痛を支える力となる。人々の祈りが重なるなか、改造の儀が始まった。

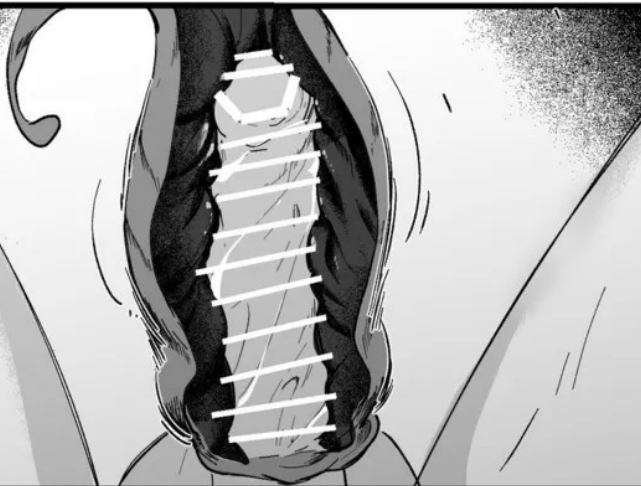




生贄の転化は、できることなら神霊の枝葉を媒介として行うのが最上とされる。だが、この村はこの地に坐す神を祀っているわけではない。周囲の部族とともに、水源のほとりに鎮まる神霊の加護を受け、同時に供犠の務めも分かち合っているのだ。



特殊な蠕虫が代用品として用いられた。司祭が樹液と薬草を混ぜた軟膏を少年の半勃起した性器に塗ると、その香りに誘われて蠕虫が蠢き始めた。



触れられた瞬間、包皮が剥かれ、蠕虫の腔内の無数の小さな肉突起が龟头と冠状溝を擦り合わせる。うねる肉塊が貪るように吸い付く。

蠕虫は食欲に性器全体を覆い、消化液を分泌し始めた。少年の身体には、净身の際についた無数の細かい擦り傷が残っていた。酸性の消化液はこれらの微細な傷口から浸透していく。

分泌液が人体に作用しても、皮膚や肉を分解せず、炎症反応を引き起こして患部を腫れ上がらせる。これが代替品として選ばれた理由でもある。油膏を貪り食った蠕虫はなおも吸い続け、さらに欲しがっている。少年がもがくと、竹の枠組みがきしむ音を立てた。

翌日、蠕虫の動きが鈍くなった頃が、儀式の成果を確かめる時であった。

やがて、少年の陰茎は元より一回り大きく、不自然に腫れ上がっていた。

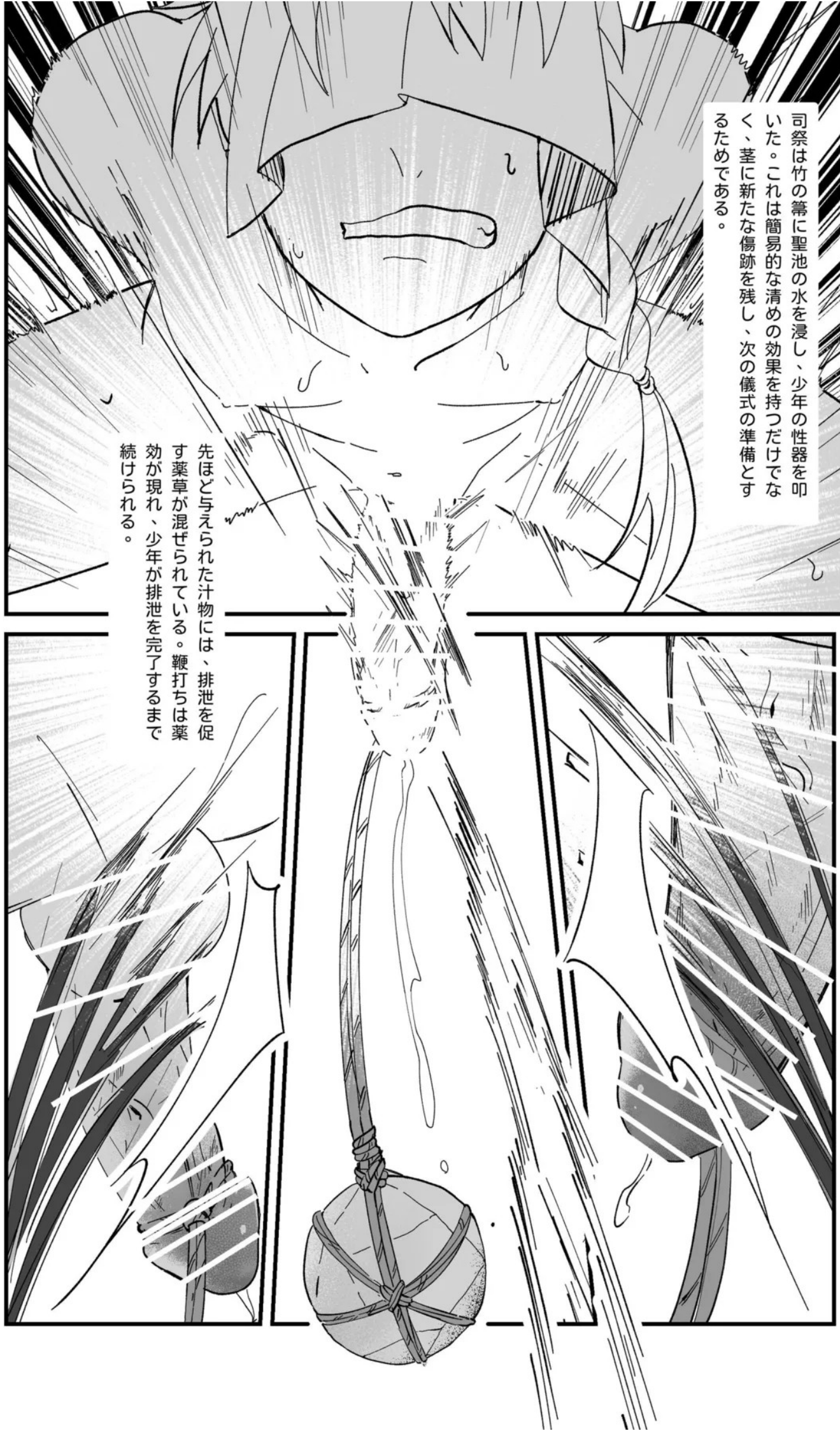


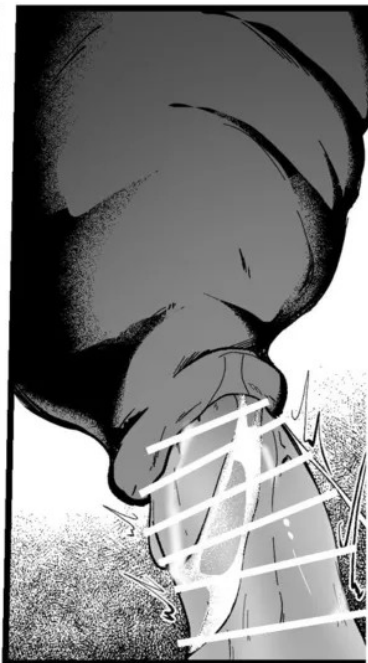
続いて、司祭は少年を吊るし上げ、性器の先端に石を縛り付けた。これは少年の陰茎が良好な形状を保つためである。司祭は水で少年の身体を清め、食事を与え、その状態を確認した。これが少年にとって唯一の息つく間であった。



司祭は竹の箒に聖池の水を浸し、少年の性器を叩いた。これは簡易的な清めの効果を持つだけでなく、茎に新たな傷跡を残し、次の儀式の準備とするためである。

先ほど与えられた汁物には、排泄を促す薬草が混ぜられている。鞭打ちは薬効が現れ、少年が排泄を完了するまで続けられる。





食事、排泄、そして性。生贄として差し出された存在から「人」の要素を削ぎ落とし、残るのはただ生理的欲求のみ。思考を手放せば、苦痛はわずかに遠のく。



未知は恐怖を呼ぶ。しかし終わりがあると知れる痛みは、まだ耐えうる。定められた手順があること、それ自体が救いでもあった。もっと大きな蠕虫が這い寄って吸い付いた。虫の侵食に直面し、少年は静かに全てが終わるのを待っていた。



しかし、表面の油を舐めるだけでは、この大きな蠕虫の欲求を満たせなかった。それは細長い触手を伸ばし、少年の性器を包み込み、上下に擦り始めた。



一つの肉芽が先端に探り当てて擦りつけられる。そして少しずつ先端の肉裂に押し込まれていく。

予期せぬ動きに少年は悲鳴を上げた。蠕虫が乱暴に探り回る。性器は擦れ合ううちに腫れ上がり、内部が引き裂かれる恐怖が痛みと共に腰から背中へ這い上がり、全身へと広がっていった。



性器が触手に一気に奥深くまで貫かれた。少年の眼前が白くなり、意識が薄れていく。朦朧とした中で、尿道が絶え間なく引っぱられ、穿たれる感覚を覚えた。



突然の痛みが少年を覚醒させた。蠕虫の交換の時だ。尿道を塞いでいた肉芽が引き抜かれると、先端から血の混じった液体が噴出した。司祭は少年の状態を確認し、慣例的な清掃を行う。



尿道の灼熱感と共に、尿が止まらず流れ出る。同時に、腫れ上がった性器も竹箒で容赦なく打ち据えられる。



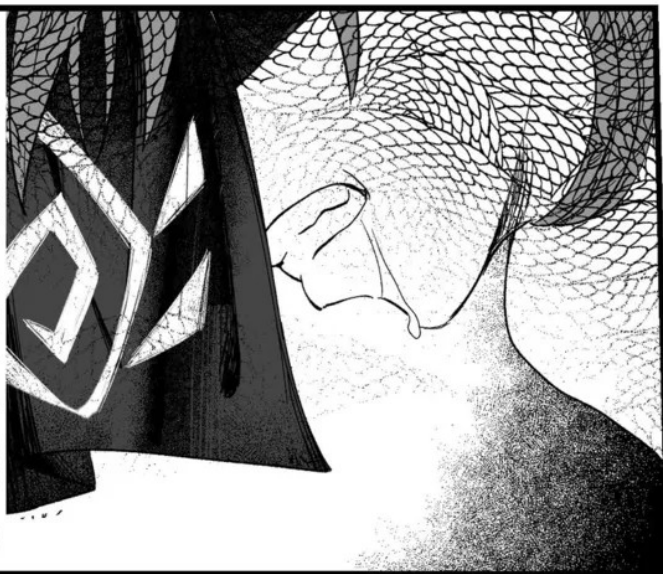
清めが終わると、少年は別の姿勢に縛り直される。両脚を開かされ、処置を施される部位には油が塗られた。




今回の蠕虫はこれまで以上に巨大で、より飢えていた。口を開けると、肉芽が少年の体に絡みつき、少しずつその内部へと侵入していった。



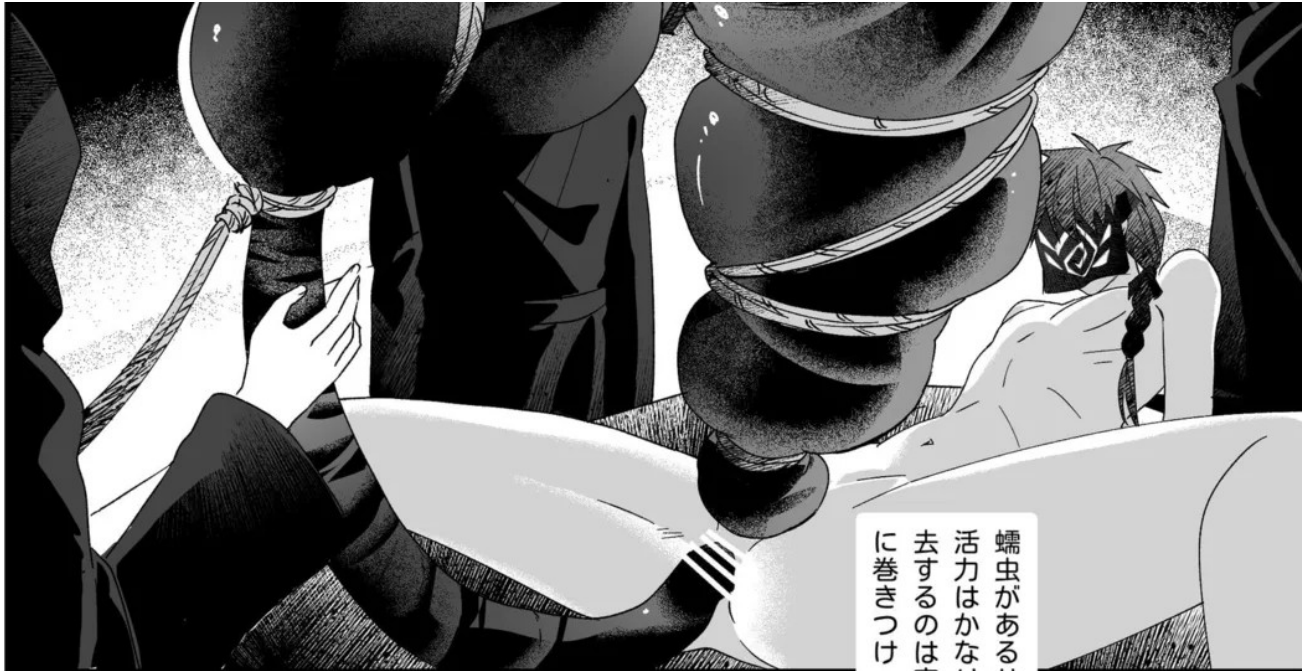
休憩のたびに、入れ替わる蠕虫はますます巨大化し、採取の手法も激しさを増していく。この循環を繰り返すことで、最終的にどんな生贄が育まれるのだろうか。痛みを避けるため、少年は可能な限り身体を弛緩させた。やがて下半身のあらゆる隙間が蠕虫の肉芽で埋め尽くされる。次の周期が始まった。



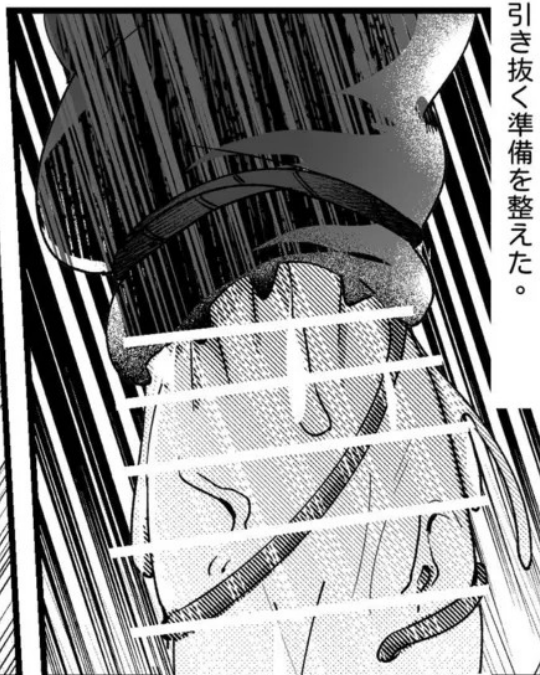
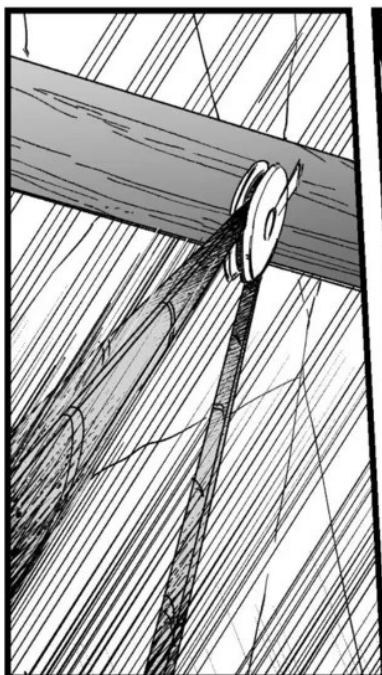


少年が石窟に閉じ込められてから、すでに二ヶ月が過ぎていた。彼の体に取りついた蠕虫は、もはや彼自身とほぼ同じ大きさになっていた。

同時に、青年はもはや悲鳴を上げなくなっていた。代わりに、かすれた喘ぎ声が聞こえるだけだった。




蠕虫があるサイズまで成長すると、虫自体の
活力はかなり低下しているものの、素手で除
去するのは容易ではない。司祭は麻縄を蠕虫
に巻きつけ、引き抜く準備を整えた。



蠕虫が退去し、少年の性器は今や常人とは異なる大きさに変貌していた。あの巨大な陰茎はついに解放され、白濁した液体が先端から絶え間なく噴き出した。強烈な刺激に少年の身体は大きく痙攣する。そのまま意識は闇へと沈んだ。






薄暗い石穴の奥では、別の儀式が静かに進められている。かすかな火の揺らぎが、二つの影を壁に映し出していた。

千年にわたり、人は神霊の力を抛りどころとして繁栄してきた。信ずる者たちは、献げ物という形でその恩寵に応えてきたのである。

しかし、異端と呼ばれる者たちは神霊を災いと見なす。そして、やがて白日の時代が訪れ、人は神を退け、自らの力で大地に立つと予言する。

生贄少年II

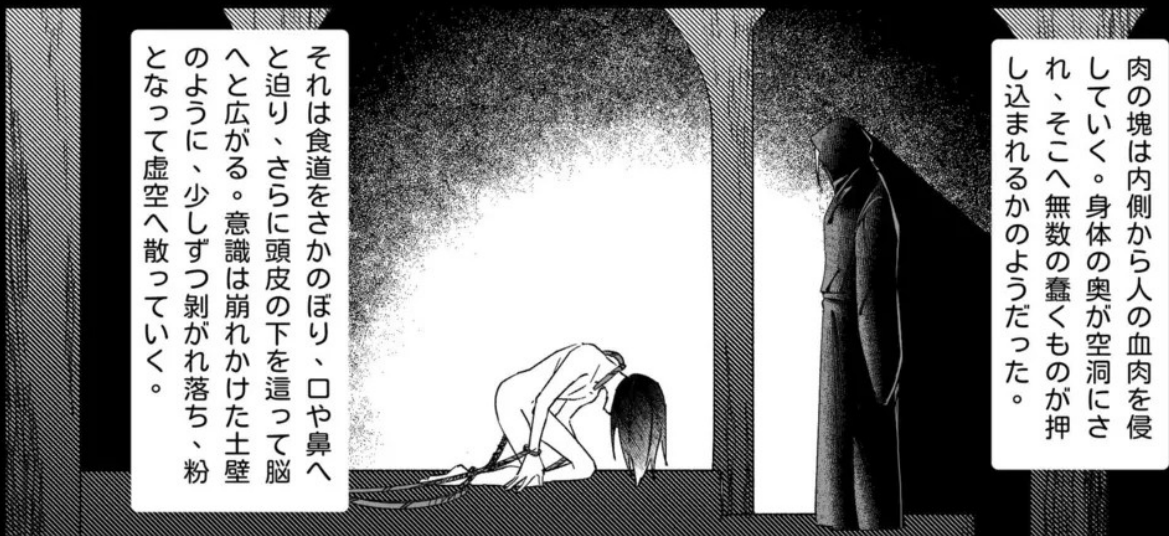
第三章 — もう一つの儀式



彼らは神霊の血肉を取り込み、変容を求める。己が身を器とし、大地へ種を蒔く。その最終的な目的は——ただ一つに収斂している。



だが、この変貌は人の姿を捨て去るに等しい。そこに伴う苦難は、かつて祭壇に捧げられた者のそれに劣らぬものだった。




肉の塊は内側から人の血肉を侵していく。身体の奥が空洞にされ、そこへ無数の蠢くものが押し込まれるかのようにだった。

それは食道をさかのぼり、口や鼻へと迫り、さらに頭皮の下を這って脳へと広がる。意識は崩れかけた土壁のように、少しずつ剥がれ落ち、粉となって虚空へ散っていく。




今日、また一人、異端の者が生まれた。



これまでの蠕虫とは異なり、今や少年の体を絡みつくものは、ただちに食ろうとはしない。柔らかな触手のようなものが体表を這い、通り過ぎた後に粘液の痕を残す。その湿り気は肌へ染み込み、体温を上げ、感覚を鋭敏にしていた。

少年の手足は左右に引き伸ばされ、胸や腰にも粘る感触が這い回る。少年のかすかな呼吸には戸惑いが混じる。しかし、その微かな思考は、下半身から押し寄せる強い刺激にすぐさま飲み込まれていった。




少年の性器に絡みついていたものが一瞬ゆるみ、
その奥に、まだ人であった名残がのぞく。


それは、変容しかけた彼が、わずかに残った自我で起こした反応だった。神に奪われかけた小さな想い——たとえ歪んだ衝動であっても、この瞬間だけは、自らのものとして掴み取るうとするかのように。



肉柱が一気に奥深くまで突き刺さる。大量の精液が注ぎ込まれ、触手が震えながら低く唸り声をあげ、狂ったように搾り取ろうとした。



少年は嗚咽した。絶頂で鈍った身体は、触手の愛撫で再び興奮する。蓄積した疲労が温かな愛撫で意識を朦朧とさせ、やがて下半身を激しく弄ばれる刺激で我に返り、再び絶頂を迎える。この繰り返し。果てしなく続く快楽は、少年の肉体に絡みつく触手のように、その肉体と精神を完全に支配していた。



与えられた快樂以外に、考える余裕などなかった。もしかすると脳みそもまでもがおかしくなったのかもしれない？ピストン運動の水音の中、少年の小さく澄んだ呻き声の中、触手の低いうなり声の中で、少年は人間の言葉を聞いたような気がした。

だがーそれは叶わぬこと
だったのだろう。


生贄少年II

第四章 — 蠟封


やついに生贄を捧げる前の最後の儀式に辿り着いた。今、少年の性器はついに神々に捧げるに足る姿へと形作られていた。その大きさも見た目も、これまでの生贄を遥かに凌ぐ驚異的なものだった。

生贄は聖山へと運ばれ、神へと献げられる。今や少年は単なる供物ではない。神と人を結ぶ聖なる媒介と見なされていた。出立の前、村では三日三晩の祭礼が催される。人々は聖なる存在として彼を拝し、讃え、供物を捧げる。





少年の巨大な陰茎と、そこに蓄えられた精液は、いずれも生贄として捧げられるものだった。細長い銀の棒が陰茎の先端を塞ぎ、根元には紐が巻き付けられ、祭儀中に少年が射精するのを防いでいた。その間、部族の者たちが少年の周りに集まり、一人また一人と精液を少年の体内へと注ぎ込んでいった。



長い柄の先に据えられた灯火から溶けた蠟
が滴り落ち、彼の身体を覆っていく。一方
の先端の尖った口から溶けた蠟液が集まり
、少年の硬直した性器に注がれる。

下部のピストン運動も続いていた。性
器の灼熱のような痛みと、腸壁を刺激
する快感が同時に少年を苦しめた。



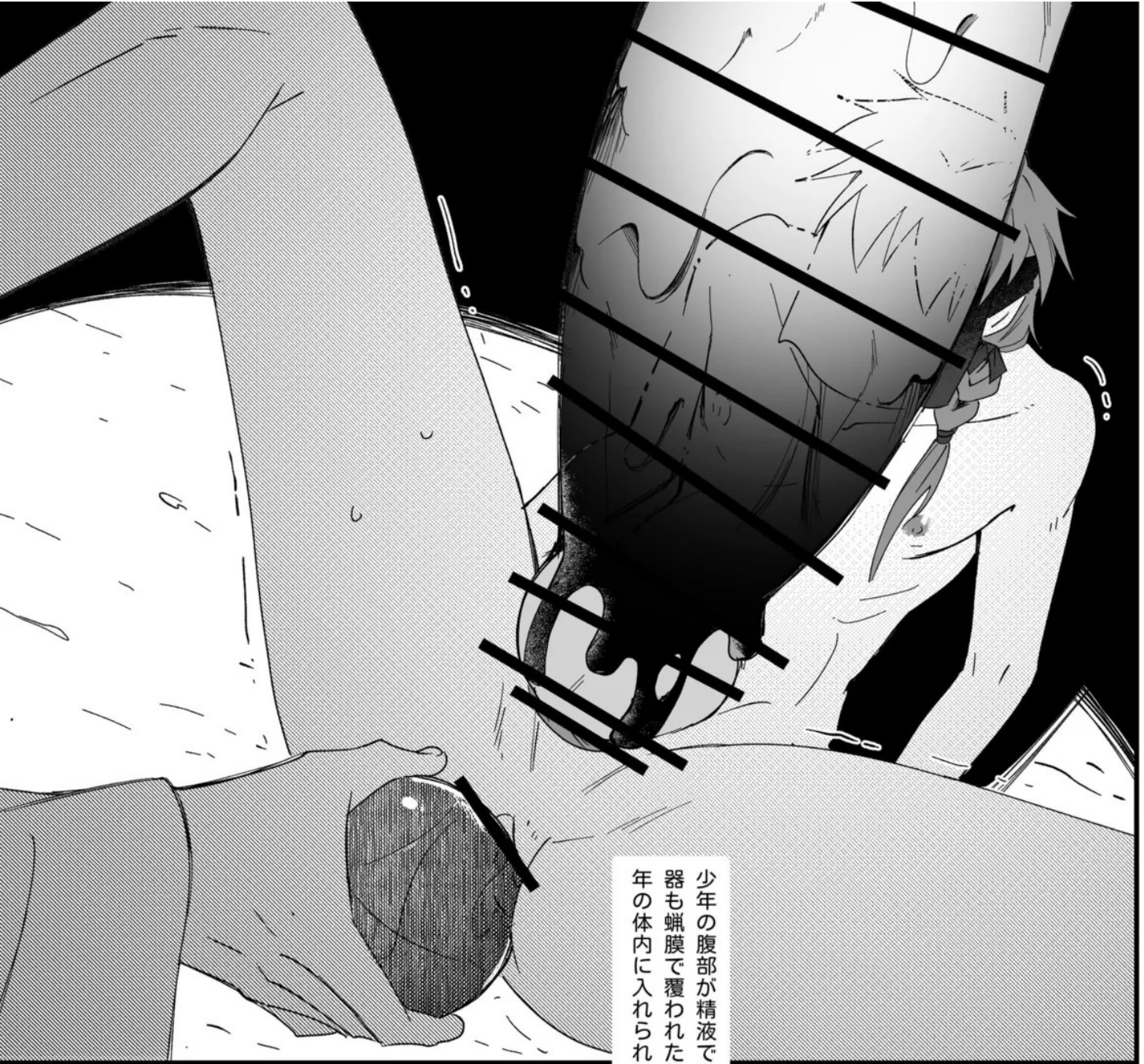
だが三か月に及ぶ拘束の果てに、少年の身体はすでに道具のように弄ばれ、その痛みと刺激にすっかり慣れきっていた。



それでも、人間に触れられ、似たような体温を感じ、相手の呼吸と喘ぎ声を聞いた。もし今、誰かが彼の頭を優しく撫でたり、名前を呼んだりしたら、彼はきつと泣きじゃくって慰めを求めらるだろう。

だがそれは、ただの空想だった。祭礼の終わりまで、彼は聖なる物として祀られ続けた。

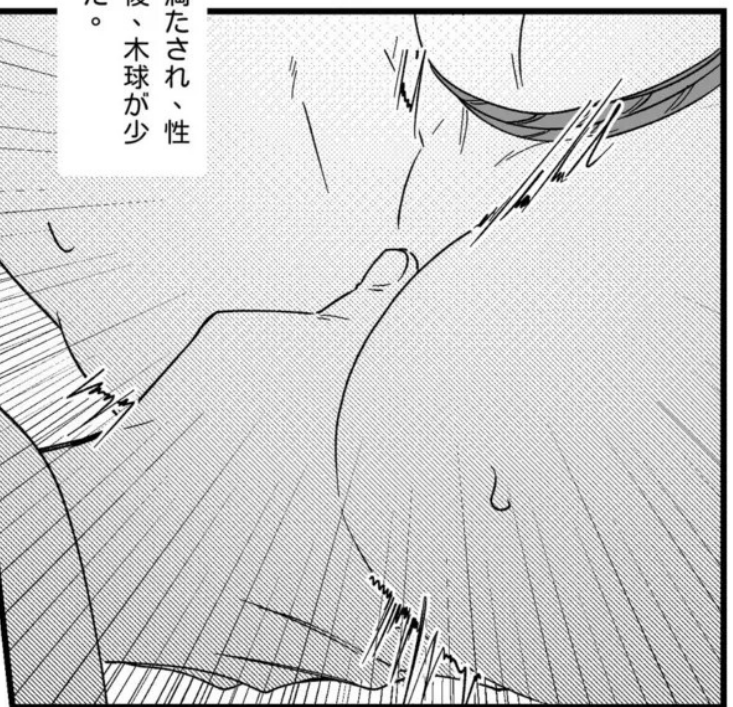




少年の腹部が精液で満たされ、性器も蠟膜で覆われた後、木球が少年の体内に入れられた。



さらに蠟液が流し込まれた。これで生贄としての準備は整った。



少年はその姿のまま、巡礼の
旅へと送り出される。



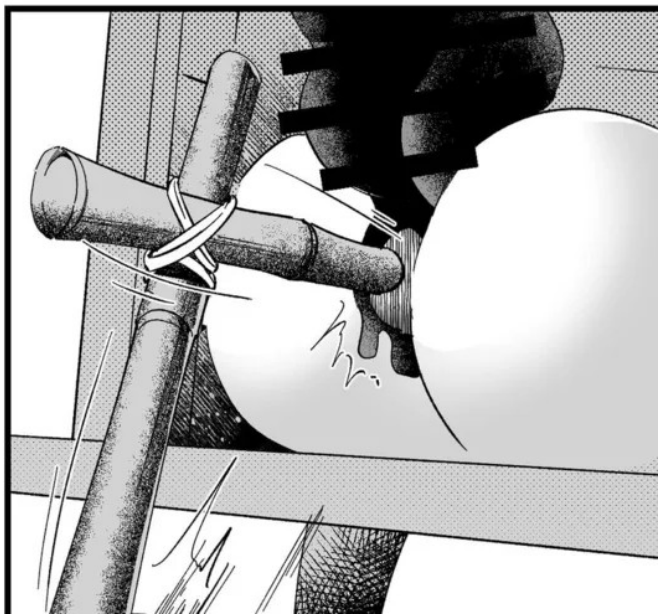
生贄少年II

第五章 — 献祭

聖山へ向かう列に、道中、近隣の信徒たちも合流する。彼らは食糧を差し出し、生贄を讃え、祝福を乞う。

一本の木棒が少年の体内へ挿入された。馬車の揺れに合わせて、木棒は浅く出し入れされ、体内の木球を押し動かす。体内の敏感な部位を刺激することで、陰茎を勃起状態に保つのだ。

参拝者の礼拝を容易にするため、馬車の速度は速くなかった。刺激によって絶頂に達することは当然難しい。少年はそうして興奮状態を保ったまま、聖なる山へと運ばれていった。

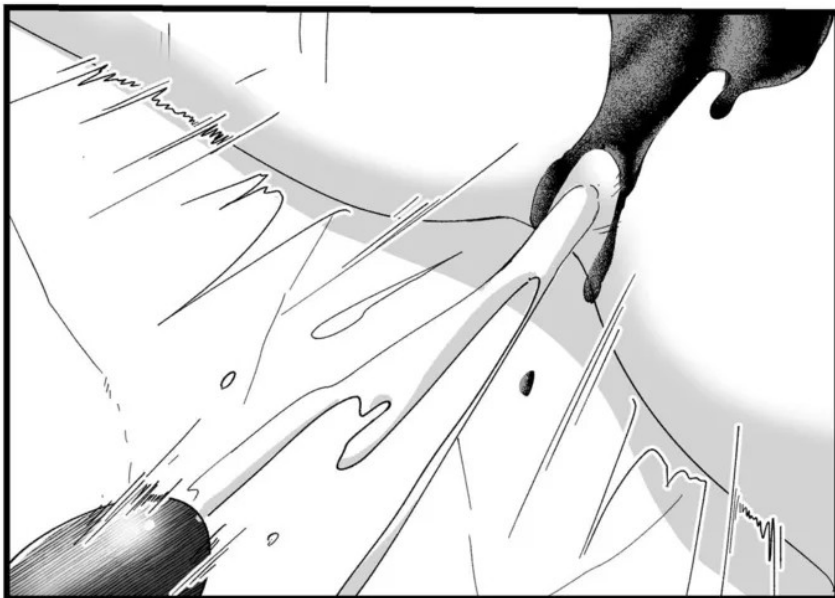
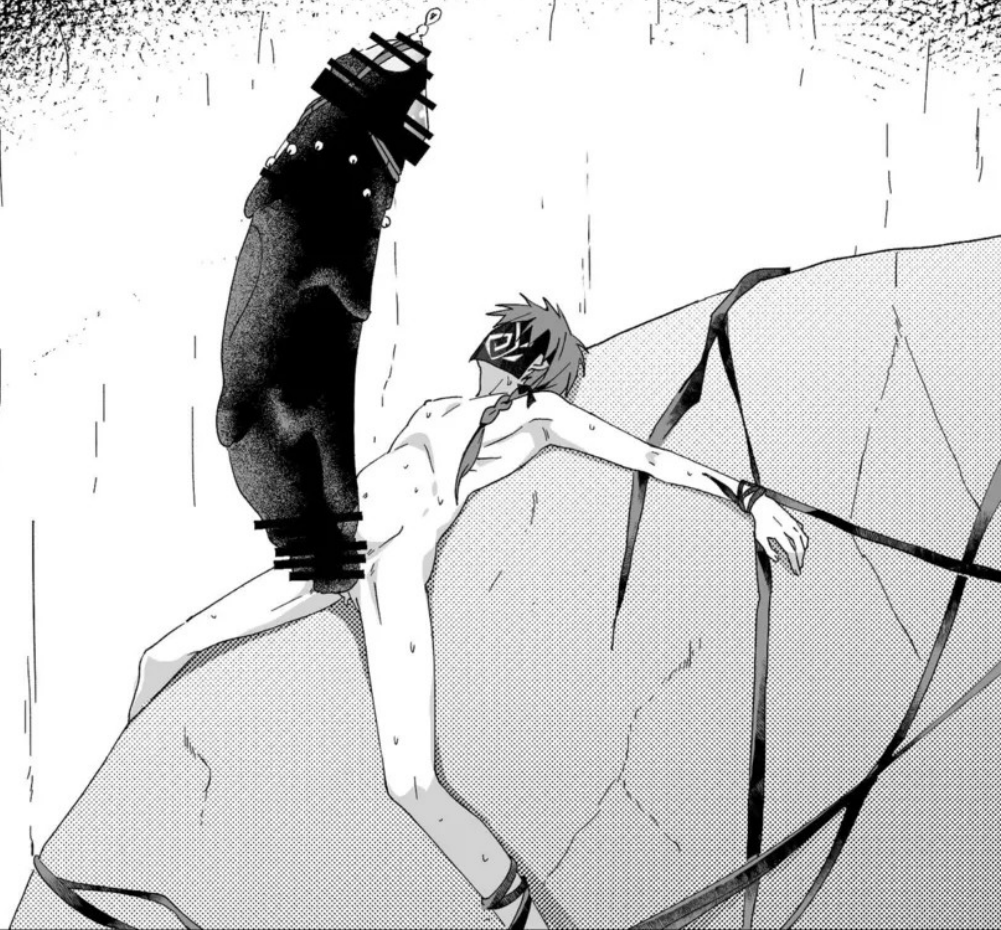


巡礼の終着点は、洞窟の中の捧げ石である。少年は巨岩に縛り付けられた。岩が彼の体を押し上げ、股間の巨根を高く掲げた。全ての苦難、全ての変貌は、この瞬間のためにあった。

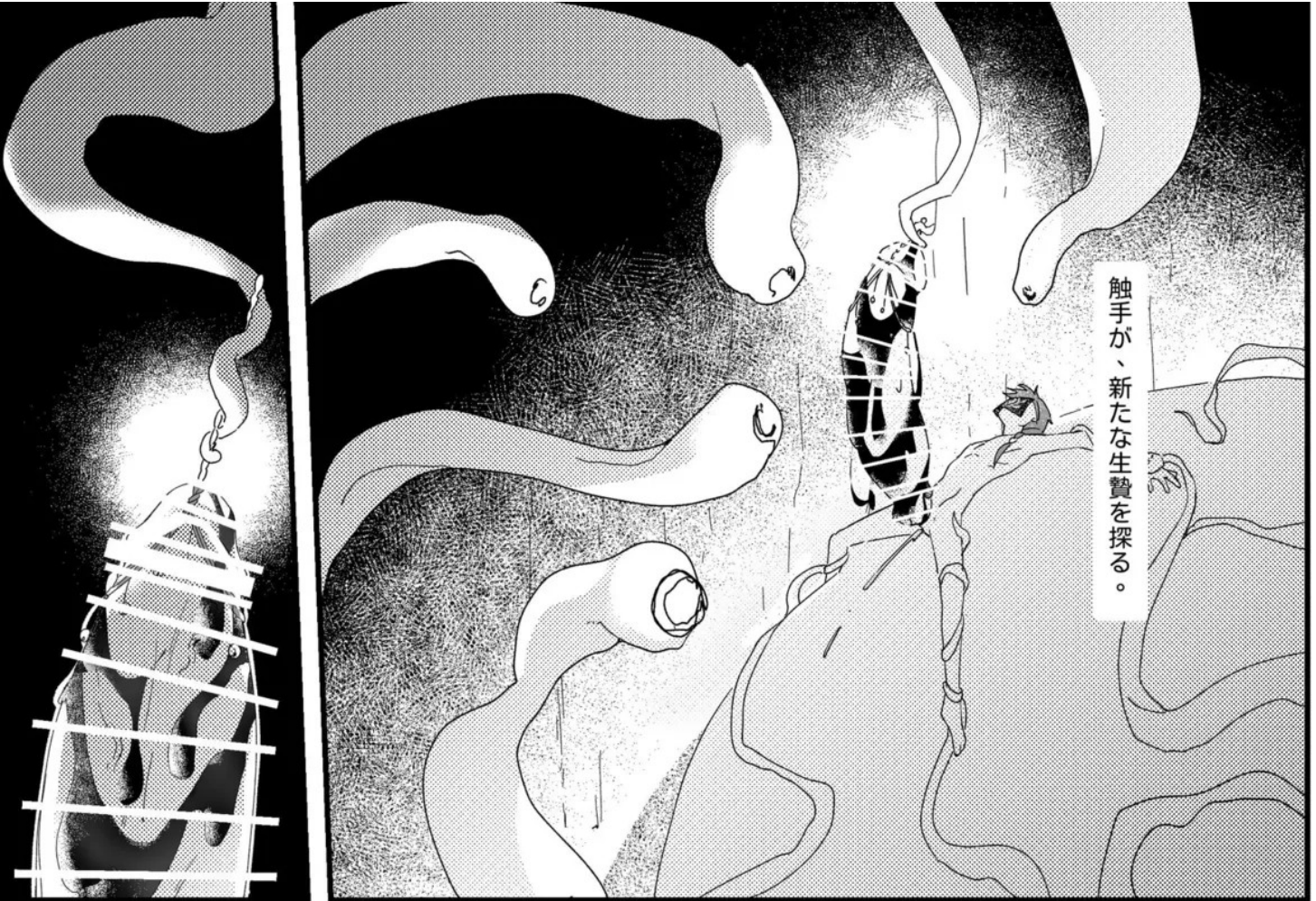
これが最後の儀式である。少年は体内の種を神霊に捧げる。そして、儀式が順調に進めば、数年後に神霊は人間の子供を産む。人類の集団は繁栄し、力強く成長する。これこそが神霊と共存する人類の、存続の道なのである。



神の住まう聖池は、湿った熱気に包まれている。水気が少年の体に触れると、皮膚から体内に染み込んでいく。聖池の水は人の体に作用し、傷を癒す一方で、人間の性欲を呼び覚まし、身体をより快楽に敏感にする。



少年は体を緩め、体内の精液が木球と共に噴き出した。人間の匂いが神々を目覚めさせ、生贄の儀式が始まった。



触手が、新たな生贄を探る。




気配は源を辿り、湿った痕を残しながらその周囲を覆う。そして、ためらいなく深部へと触れていく。




そして容赦なくその中に侵入する。肉壁は粘り気のある太い触手に押し広げられ、奥深くを打ちつける。強烈な衝撃が腹部から駆け上がり、ついに陰茎の先端から噴き出した。




匂いに導かれ、神は献げられた本体へと辿り着く。




触手は巧みに刺激し、続いて突起のある髭根が入り口に押し当てた。



こうした刺激に、少年の身体はすでに慣らされていた。



だが決定的に異なることがあった。神が与えるのは、ただ純粹な快樂のみだ。



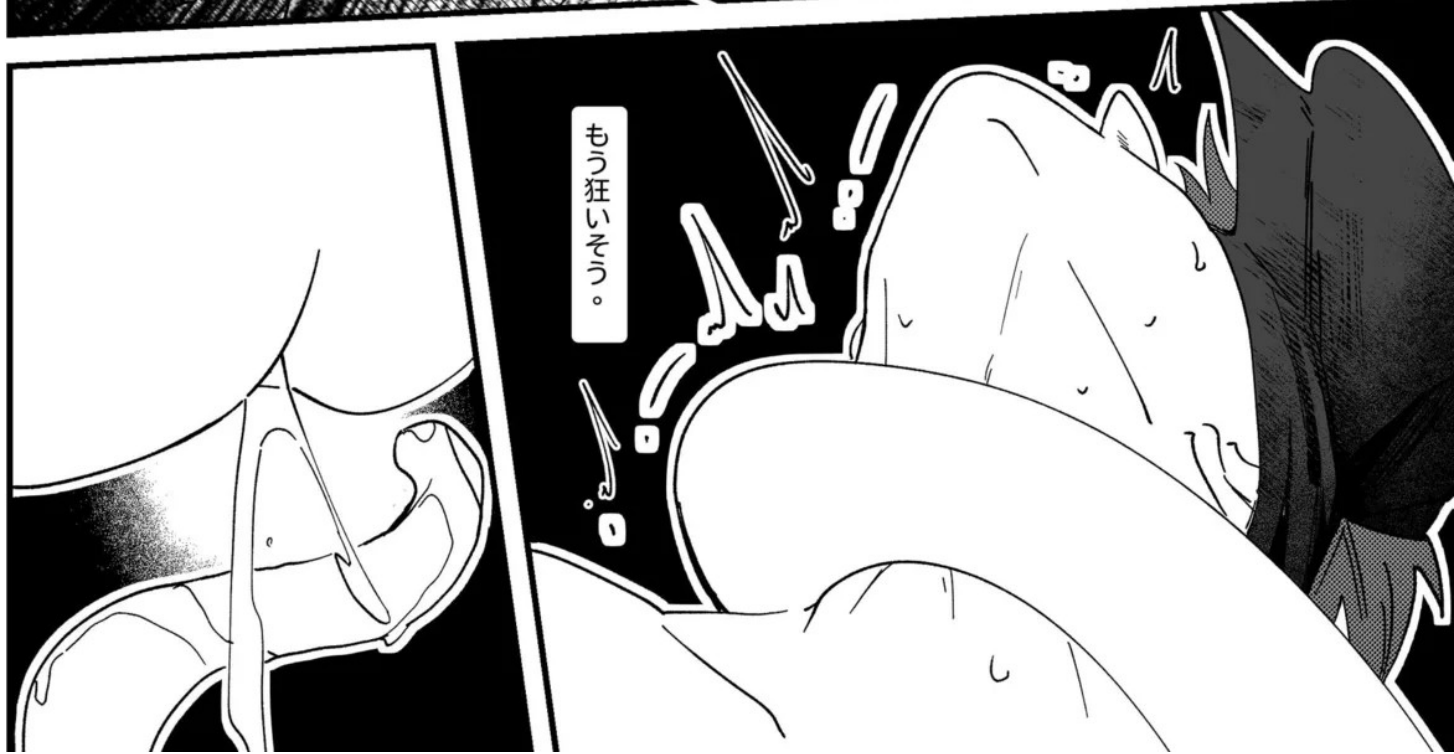
本来なら耐えるべき苦痛を知っているからこそ、その痛みがまるで神智を溶かすような快樂に取って代わられた時、恐怖が自然と湧き上がる。



ああ……今ここで引き抜かれたら……



身体は絶頂の余韻で震えていた。しかし、腸内の触手は止まる気配すら見せなかった。触手は絶え間なく擦り、体内の敏感なポイントを突く。頭の中は真っ白になった。精液が噴水のように溢れ出し、止めることはできなかった。



もう狂いそう。



少年の肉壁は容易に触手の先端を受け入れた。



少年が解放された途端、両脚が大きく開かれた。もう一本の触手が後穴に押し当てられる。

その後、少年の限界を試すかのように、触手は少しずつ深く押し込んでいく。深く侵入するたびに、腸壁の内側にある、触れただけで震え上がるほど敏感な部位を擦り上げる。



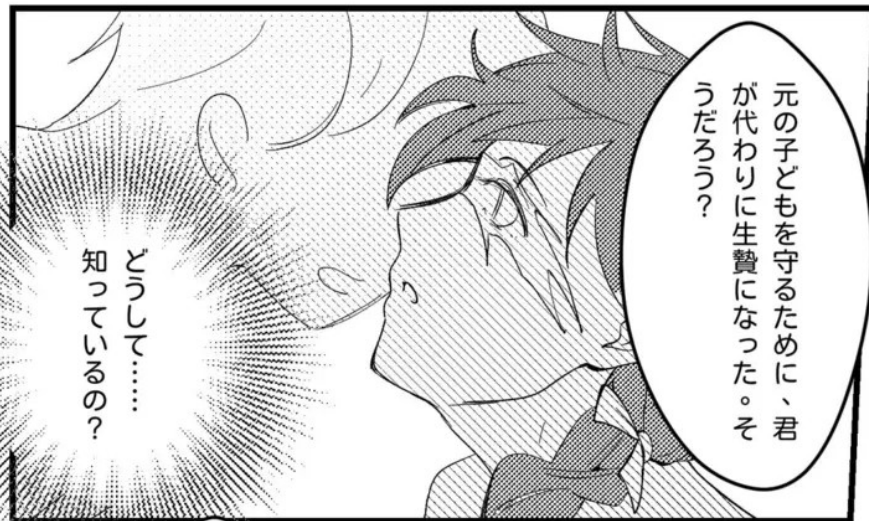
あっ……もう、だめだ。これ……もし一気に引き抜かれたら——

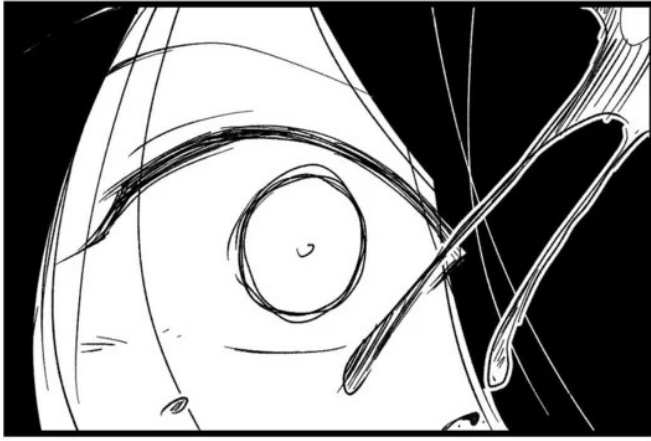


本当に、壊れてしまうかも。









僕たちの世界は
きつと交わることなんて
なかったんだろうね



ははは……まるで、僕はいつも
君を泣かせてばかりいるみたい
じゃないか。

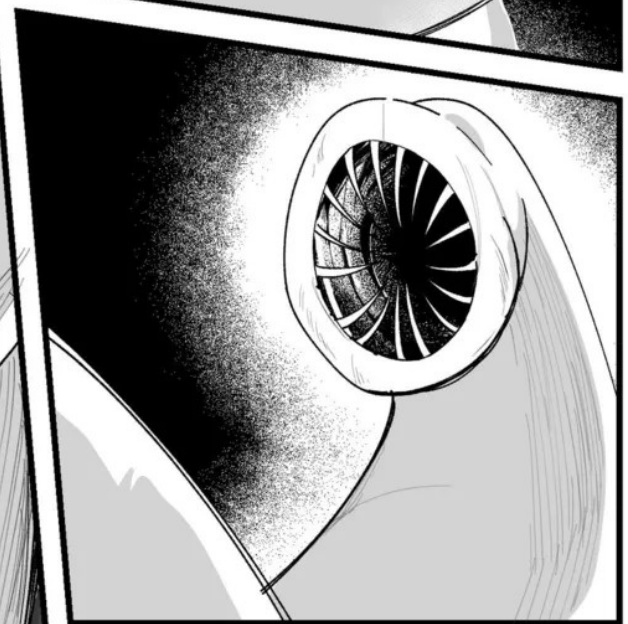
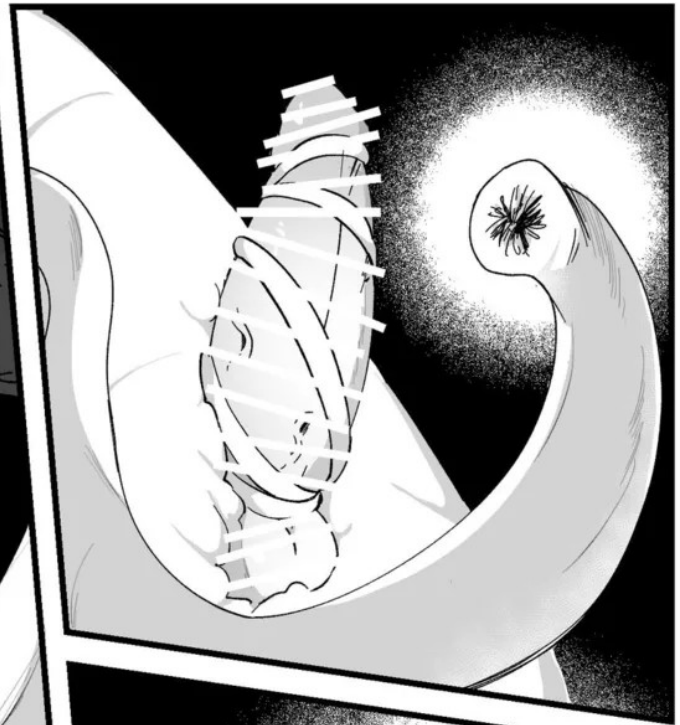
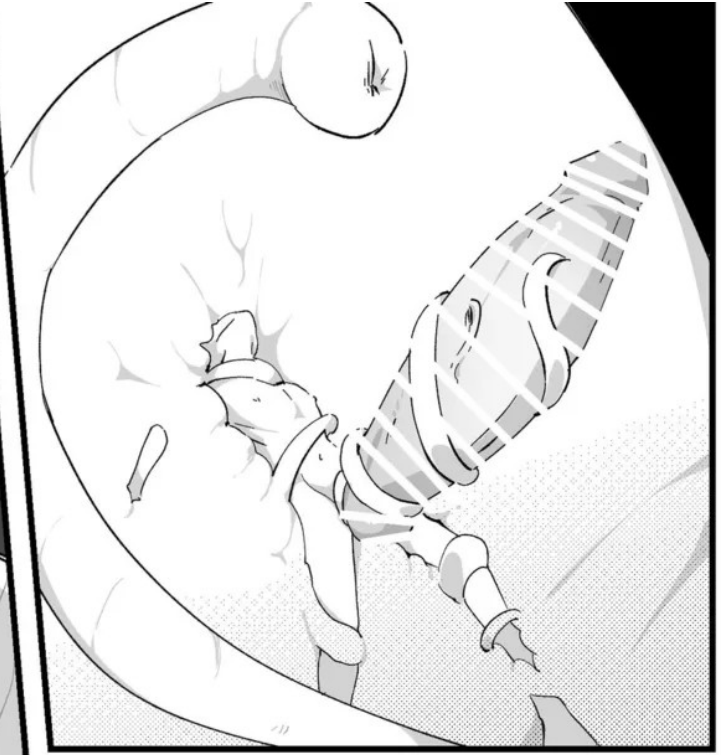
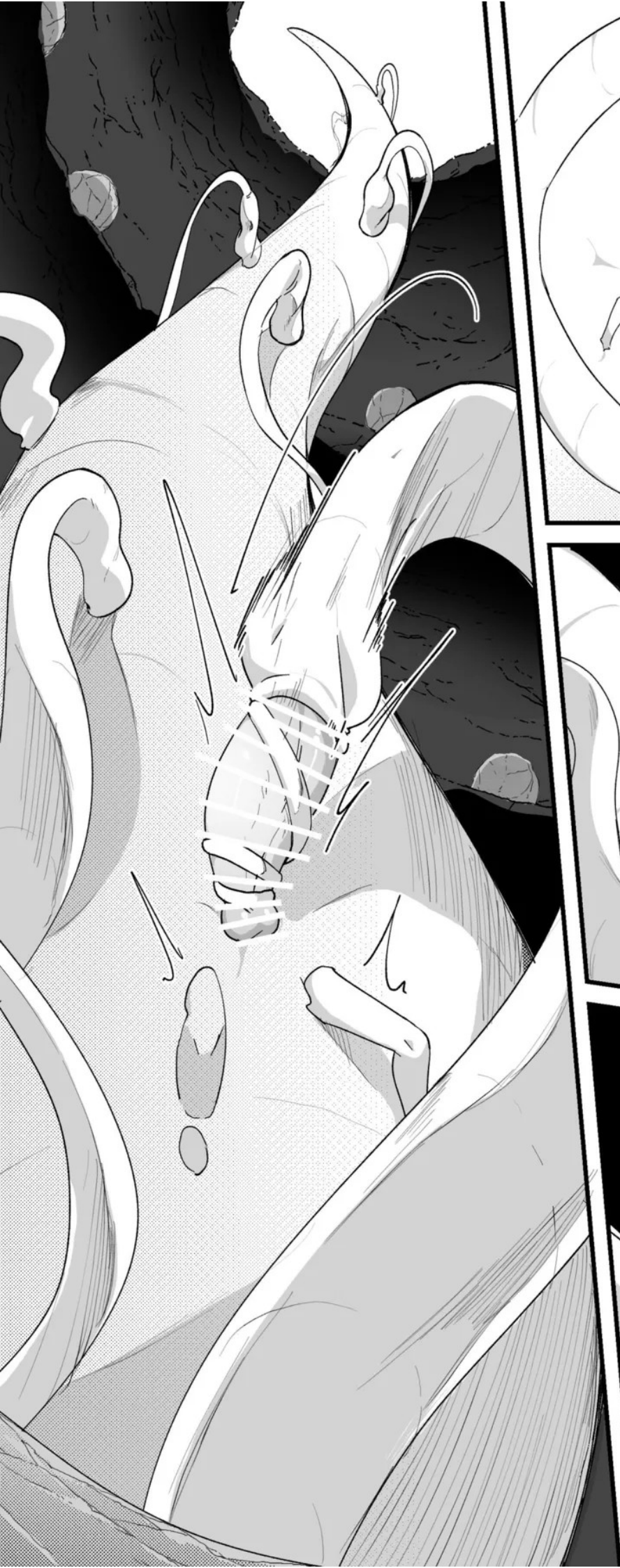


でも、最後に
もう一度この顔を見れるなんて――



本当に良かった。

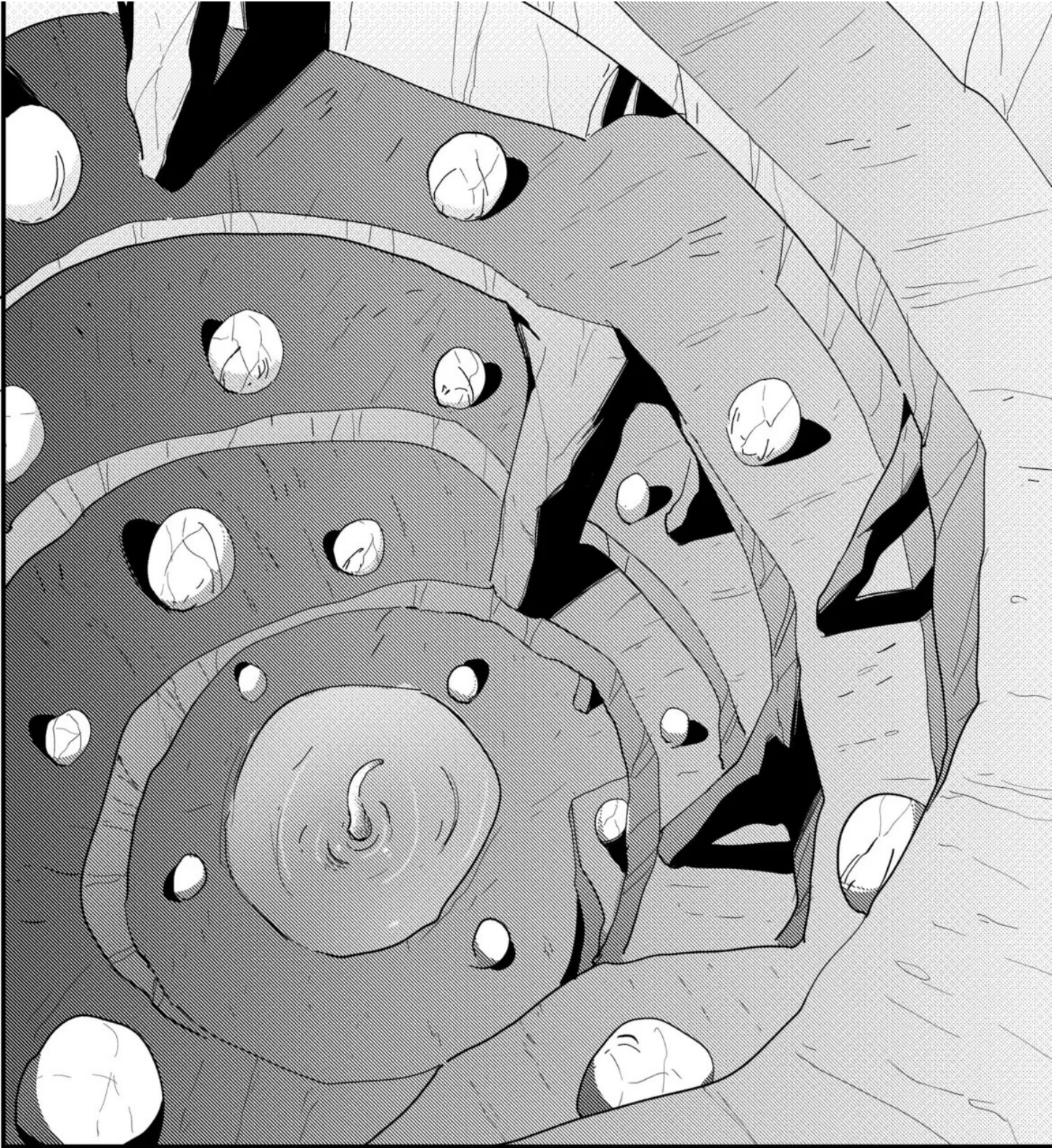












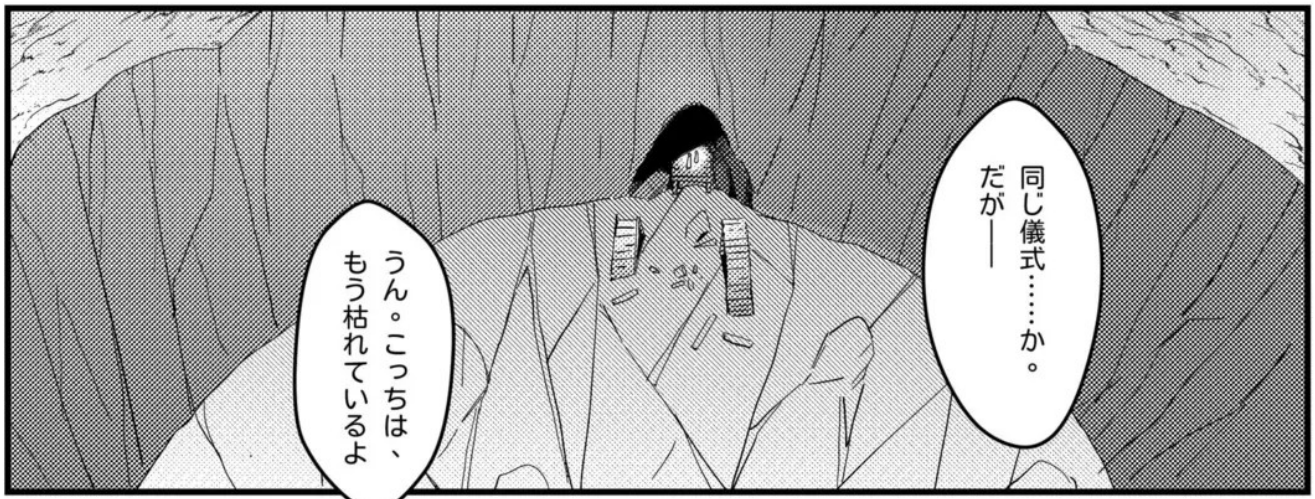
生贄少年II—巨根崇拜

BY Y-Doro. 2026.02.07

| PIXIV: 69152922 | Twitter: @y_doro_0126

日本語翻訳/Hanabara







それでも、
それを人間と呼べるのか？

生贖少年II byY-Doro. 2026.2

| PLURK ID: River0401 |

| PIXIV: 69152922 | Twitter: @y_doro_0126 |

